

東京都文京区の千駄木

地区は谷中、根津とも
に東京の下町叙情あふれ
るスポットとして有名な
なり、私たちが作った雑
誌から発生した「谷根千」
という呼称も定着した。

しかし、そんな谷根千の
谷中地区に、我が国初の
西洋リボン工場があり、
住民に親しまれていたこ
とを知る人は少ない。

私は1984年、谷根
千地区の地域雑誌「谷中
・根津・千駄木」を創刊
した。その雑誌の取材で、
地区を流れる旧藍染川の
歴史を調べることにな
り、西洋リボン工場の話
を初めて聞いた。

工場は「岩橋リボン製
織所」として1894年
に建てられ、藍染川のほ
とりで操業を始めた。明
治維新後の急激な西洋化
に伴い、男性は帽子、女
性は洋服への装飾という
用途で使う西洋リボンの
需要が高まっていた。そ
こで、国内で初めての生
糸を使った高級西洋リボ
ンの国産工場を谷中に建
てることになった。

なぜ谷中なのか。藍染
川は明治時代、水質が非

服飾史に彩り「谷中リボン」

◇西洋化進んだ明治 初の国産工場の歴史と文化伝える◇ 山崎 範子



常に良く、良い水が不可
欠な染め物の生産に向い
た土地だった。しかも大
消費地である東京都心に
近い。工場には先日新1
万円札への採用が決まっ
た実業家洪沢栄一も組合
員として参加した。実は
この洪沢家の墓所は近く
の谷中霊園にある。

洪沢らの出資から生ま
れたこの工場はギザギザ
の「のこぎり屋根」が特
徴で、約500坪の敷地
に計5連の工場が立って
いた。これらの建物は直
射日光を避け、柔らかい
光を入れるために窓が北
向きにつくられていた。

また工場内は織機を入
れるために空間が広々と
しており、少ない柱でし
っかり支える構造になっ
ていた。当時の繊維産業
の工場でかなり取り入れ
られた建築方法だった。

また工場内は織機を入
れるために空間が広々と
しており、少ない柱でし
っかり支える構造になっ
ていた。当時の繊維産業
の工場でかなり取り入れ
られた建築方法だった。



谷中に建てられた西洋リボン工場の
建物は戦後、印刷会社で使用した
—記事の関連映像を電子版に

工場は戦後1960年
代まで操業していたが、
需要減により閉鎖。その
後は旭プロセス製版とい
う印刷会社が長年使っ
てきた。しかし2013年
8月、工場の建屋が取り
壊されるという知らせが
あった。私は何とかこの
建物の一部でも残せない
かと関係者に訴え、建物
ののこぎり屋根部分など
を残すことにした。そし
て洪沢栄一が関与した企
業の一つで、現在唯一「洪
沢」の名を残す洪沢倉庫
に相談した。すると重要
性を理解していただき、
部材の運搬と保管に協力
いただいた。

工場の解体から1年
後、私たちは驚くべきも
のを譲られた。工場や西
洋リボンに関する数多く
の資料だった。フランス
の絹業史や蚕の飼育
法、織機の使い方などに
関する資料などがあり、
リボンのデザインをまと
めた見本帳も見つかつ
た。見本帳にはリボンの
実物も貼られ、素晴らしい
保存状態で残ってい
た。全部で103点の資
料があった。

これらの資料を残した
のは、当時工場を運営し
ていた渡辺四郎という人
物だ。渡辺は実業家の渡
辺治右衛門の息子で、も
ともと技術者として工場
に入ったが、深い知識と
好奇心の強さもあって工
場を運営する立場になっ
た。自ら欧州に渡り、膨
大な資料を集めた。

私たちはこれらの資料
を多くの人に見てほしい
と、16年に「谷中のリボ
ン」に関する企画展を開
催した。昨年は東京家政
大学のイベントでも紹介
された。のこぎり屋根な
どの部材は現在、洪沢倉
庫から千葉県東金市内に
ある文化財用の大きな倉
庫に移し、活用されると
きを待っている。

谷中リボンの跡地には
現在、工場があったこと
を示す記念碑がある。工
場の遺産は日本の明治以
降の経済発展の状況を知
る上でも貴重だ。これか
らも谷中のリボンの歴史
を語り継いでいきたい。
(やまさき・のりこ) 谷
根千工房代表)

21世紀の 美術館建築

建築評論家 五十嵐 太郎

(8)

真上に現代建築の美術館が付加さ
れた。したがって、ここでは20
00年におよぶ異なる時代が共存
している。

どんなにお金をかけても、つく
でしか成立しない特殊な空間をも
つ。すなわち、発掘された古代ロ
ーマの遺跡やゴシック様式の教会
の廃虚を現場で保存しつつ、壊れ
た外壁には新しい壁を継ぎ足し、
設計はコンペで選ばれたスイス
のピーター・ズントーだ。彼は静
謐な光の空間や素材感のあるデザ
インを特徴としている。過去の建
築を包む外壁は、隙間ができるよ
うにレンガを積み、細
い柱が林立する荘厳な
宗教空間に印象的な光
を導く。そして天井が
高い象徴的な階段を上
ると、展示の空間にた
どり着く。このフロア
は不規則な輪郭になっ
ており、箱型の展示室
を壁に沿って配置する
が、これらの余白も個
性的な展示スペースと
して活用されている。

「聖コロンバ教会ケルン大司教区美術館」



imageBROKER/Thomas Robbin/amanaimages提供

また数力所に大きな
開口を設け、大聖堂な
ど、ケルンの街並みを見
せる。この美術館の中
世と現代の美術を混
在させる展示の手法も
センスが良い。もちろ
ん、それは建築が複数
の時間を融合している
のと同じ感覚を共有し
ていこう。